

# ZACROS

## 株主通信

証券コード：7917

当社の詳細なIR情報は、  
ホームページをご覧ください。

藤森工業のホームページの「IR情報」では過去の株主通信や決算  
短信などの情報を見ることができます。また当社製品の情報や  
企業情報、研究開発や環境への取り組みなどもご覧いただけます。

トップページ



ここをクリック

IR情報トップページ

<http://www.zacros.co.jp/>

### 株主メモ

事業年度 4月1日から翌年3月31日まで  
 定時株主総会 6月中  
 基準日 定時株主総会 3月31日  
           期末配当 3月31日  
           中間配当 9月30日  
 単元株式数 100株  
 株主名簿管理人 東京都港区芝三丁目33番1号  
                   中央三井信託銀行株式会社  
 同事務取扱所 〒168-0063 東京都杉並区和泉二丁目8番4号  
 (郵便物送付先) 中央三井信託銀行株式会社 証券代行部  
 (電話照会先) (証券代行事務センター)  
                   電話 0120-78-2031 (フリーダイヤル)  
 同取次窓口 中央三井信託銀行株式会社 全国各支店  
                   日本証券代行株式会社 本店及び全国各支店

#### ●株式に関する諸手続きについて

住所変更、単元未満株式買取請求、名義書換請求及び配当金振込指定に必要な各用紙のご請求は、下記の株主名簿管理人中央三井信託銀行のフリーダイヤルまたはホームページをご利用ください。

- ・フリーダイヤル 0120-87-2031 (24時間受付：自動音声案内)
- ・インターネット／ホームページアドレス  
[http://www.chuomitsui.co.jp/person/p\\_06.html](http://www.chuomitsui.co.jp/person/p_06.html)  
 (証券保管振替機構(ほふり)をご利用の方は、お取引口座のある証券会社等へお申し出ください)

#### ●株券電子化実施前後の単元未満株式の買取請求のお取扱いについて

株券電子化制度への移行に伴い、ほふりに株券を預けられていない株主様の単元未満株式の買取請求につきましては、次のとおりのお取扱いとさせていただきますのでご了承ください。

1. 2008年12月25日(木曜日)から2009年1月4日(日曜日)(実質2008年12月30日(火曜日))までに受付したものの買取代金の支払は2009年1月26日(月曜日)とさせていただきます(買取価格はご請求日の終値となります。なお、2008年12月30日までに値が付かない場合は返却させていただきます)。

2. 2009年1月5日(月曜日)から2009年1月25日(日曜日)までの間、単元未満株式の買取請求の受付を停止します。

なお、ほふりに株券を預けられている株主様に関しましても、株券電子化直前に単元未満株式の買取請求の取次停止期間が設けられますが、詳細はお取引証券会社等にご確認ください。

### 藤森工業株式会社

〒103-0002 東京都中央区日本橋馬喰町一丁目4番16号 TEL.03-3661-4211 (代表)



第79期 中間のご報告  
2008年4月1日～2008年9月30日

藤森工業株式会社



代表取締役社長 藤森 明彦

## 環境の変化に柔軟に対応し、 市場のニーズを具現化する技術力で 成長を目指します。

2008年度上期（4月～9月）における国内経済は、景気後退局面が続く展開となり、さらに9月中旬以降の金融危機の影響が新興国にまで波及するなど、内外実体経済への影響が危惧される状況となっています。

当社グループが属する市場環境としては、機能材料関連ではフラットパネルディスプレイ市場においてパネルメーカーが生産調整を実施しており、また包装・容器関連市場では原材料価格上昇分の製品価格への転嫁が難航する状況で推移しました。

このような環境の下、当社グループの化成品事業では、機能材料部門のLCD（液晶ディスプレイ）用マスキングフィルム、包装部門の詰め替え用スタンディングパウチ等の受注拡大により、売上高は前年同期を上回る実績を残すことができました。損益面では、原材料価格の値上げ、昨年新設した当社昭和事業所設備の全面稼働に伴う減価償却費の増大等がありましたが、機能材料部門において昭和事業所を中心に一層の生産効率向上に努めたことと、包装部門での高付加価値製品の販売を強化したこと等から、前年同期比で増益となりました。

その結果、上期における業績は、売上高403億4百万円（前年同期比4.9%増）、営業利益5億88百万円（前年同期は2億52百万円の営業損失）、経常利益6億52百万円（前年同期は1億95百万円の経常損失）、上期の純利益は2億12百万円（前年同期は1億1百万円の純損失）となりました。

当社は、創立100周年となる2014年に向けて企業価値を高めるため、当期からの3年間で、企業体質のスリム化を図り、その後の3年間で高度情報通信社会、高齢化社会および環境対応社会の到来に向けて、「情報通信」「ライフサイエンス」「環境」「エネルギー」の4つの事業分野への注力を図ってまいります。そこで、さらなる飛躍を目指した当社の取り組みを分野ごとにご紹介させていただきます。

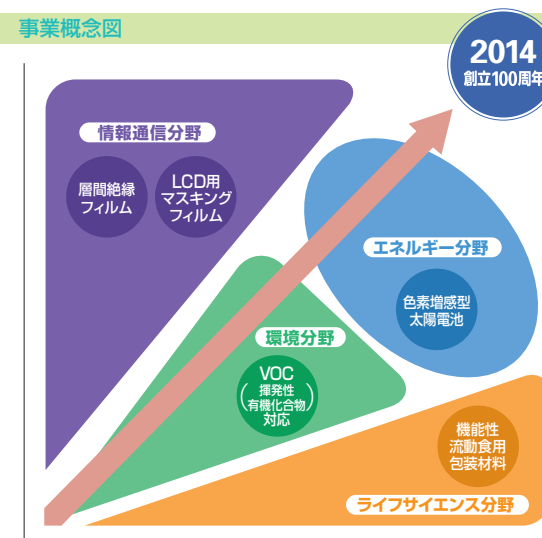
### ●情報通信・ライフサイエンス分野における取り組み

情報通信・ライフサイエンス分野での  
貴社の取り組みはいかがでしたか。

情報通信分野では、従来からの粘着・剥離の技術を深耕させ、LCD用マスキングフィルムや層間絶縁フィルムの改良と、その応用開発製品に注力しています。例えば、携帯電話や電車等の改札で使用されるSuicaやPASMO等のICカードの急速な普及による電波・電磁波を原因とした機器同士の干渉等の社会的課題への対策として、機器自体からの有害な電波・電磁波遮蔽に有効な透明シールドフィルムの開発を行っています。また、この技術を建築分野にも応用展開することで、情報漏洩防止の提案もしています。また、昨年大型投資を行ったLCD用マスキングフィルムの高機能化に加え、次世代表示媒体である有機ELや電子ペーパーの関連部材についても開発を進めています。

ライフサイエンス分野では、高齢化社会の到来を見据え、より快適な生活（クオリティオブライフ）を実現できる包装材料やシステム、ならびにバイオ関連製品の開発を行い商品化につなげています。具体的には、高齢者の介護において自宅療養時に使用される機能性流動食用包装材料の開発・販売を行っており、また、薬液や化粧品向けに開発した、内容物の品質維持に優れた包装材料は、今年7月に開催されたインターフェックスジャパンに出品し注目を浴びました。さらに、独立行政法人科学技術振興機構の『独創的シーズ展開事業委託開発』に選定された「抗血栓治療におけるリアルタイム薬効モニタリングシステム」の開発は、今後の血栓性疾患のオーダーメイド医療に大きく寄与できるものと期待されています。

### 事業概念図



## Topics

### 第21回インターフェックスジャパンに 出展しました。(2008年7月2日～4日)

東京ビッグサイトにて開催された、医薬品・化粧品業界が一堂に会すアジア最大規模の展示会「第21回インターフェックスジャパン」に出展し、「薬液バッグ」など衛生性・安全性に優れた製品群が注目を浴びました。また同時開催の「国際バイオEXPO」では、新製品「細胞培養バッグ」を展示。抗体医薬などの研究開発で使用され、洗浄や滅菌が不要になるため、フラスコなどにかわる容器として期待されています。



●環境・エネルギー分野における取り組み

環境・エネルギー分野に対する注目が高まっていますが、どのような対応を行っていますか。

本年は北海道・洞爺湖における環境サミットの開催や原油価格の高騰など、環境・エネルギー分野に注目が集まりましたが、これらの分野における取り組みも当社の重要なテーマです。

環境対応への一環として、シャンプーなどのボトルへの詰め替え用商品が多くなっており、当社はそのパイオニアとして各種用途に幅広く対応しております。最近の話題としては、業界大手である(株)資生堂様のビッグブランド「TSUBAKI」の詰め替え用パウチの受注があります。「内容物を保護し、物流に耐え得る」という、パッケージに与えられた従来の役割を果たすだけでなく、営業、研究および生産の各部門が連携して「機能性」「美しさ」を追求し、新たなコンセプトの包装材料を開発できたことは、「包むことによる新しい価値を創造」したものであったと考えています。

また、次世代のクリーンエネルギーとして期待されている、低コスト・高効率な「色素増感型太陽電池」の共同開発や、VOC(揮発性有機化合物)処理システムの開発も行っています。

当社は、これまでに培った粘着技術、ラミネート技術などを駆使して、「情報通信」「ライフサイエンス」「環境」「エネルギー」の各分野に対し、『包む価値の創造』『顧客ウォンツの実現』を掲げ、日々着実な歩みを進めています。



詰め替え用製品群

「TSUBAKI」詰め替え用パウチが「2008日本パッケージングコンテスト」においてトイレタリー包装部門賞を受賞しました。

Topics

2008東京国際包装展——東京パック2008——に出展しました。  
(2008年10月7日～11日)

幅広い産業分野のお客様から確かな信頼をいただいている当社製品を、アジア最大の総合包装展である「2008東京国際包装展」へ、素材技術、機能性部材、環境対応、開発技術といったカテゴリーにて出展しました。特に、環境対応コーナーでは、「複合材のマテリアルリサイクル」と「マイクロガスタービンVOC処理システム」を展示し、資源の有効利用という観点から、ご来場の方々に高い関心を示していただきました。



VOC処理システムの展示



●組織力の強化

本年6月に組織改編をされていますが、その目的と現時点での評価をお聞かせください。

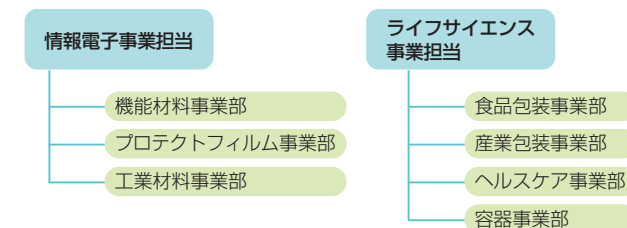
近年の技術革新は目覚ましく、社会、経済環境も短い周期で大きな変化をしております。このような状況において、当社がいかに持続性をもち成長していくかですが、生物学者のダーウィンは「この世に生き残る生物は、最も力の強いものや最も頭のいいものではない。唯一生き残るのは変化に対応できるものである」と記しているそうです。

当社は本年で創立94年目となりましたが、既存の技術を守りながら、新たな社会のニーズ・シーズを取り込み製品化することで数々の新製品を作り出してきました。その根幹にあるのは「お客様の要望を、いかに製品という形で具現化するか」であり、マーケティングと技術の融合によって「包む価値の創造」に貢献してきたと考えています。

本年6月、より機動性を有しながら柔軟に活動できる企業組織を作るべく、従来の6事業部を、2事業担当・7事業部に再編いたしました。

市場の変化や動きがよりスピーディーな機能材料、プロテクトフィルムおよび工業材料の3事業部は情報電子事業担当が統括し、従来からの基幹事業である食品包装、産業包装、ヘルスケア、容器の4事業部はライフサイエンス事業担当が統括します。

加えて、開発部門・生産部門をそれぞれ全社的に統括する部門担当を設置しました。事業部の枠にとらわれない横断型の活動を容易にすることで、よりアクティブに変化に対応できるマーケティング・研究開発活動を充実させ、その成果を皆様にご披露できるものと考えております。



組織改編のポイント

100周年に向けて、より強い企業となるべく、成長分野および顧客を重視した市場別組織を編成するとともに各部門の機能強化を図る体制を構築

新組織の概要

- 市場別組織の編成  
機能材料、プロテクトフィルム、工業材料、食品包装、産業包装、ヘルスケア、容器の各事業部に編成し、市場に対応した組織としました。
- 事業担当の新設  
機能材料、プロテクトフィルム、工業材料の3事業部を統括する情報電子事業担当と、食品包装、産業包装、ヘルスケア、容器の4事業部を統括するライフサイエンス事業担当を新設しました。
- 部門担当の設置  
事業部間の横断性を強化する目的で、その統括的な役割を持つ開発部門担当、生産部門担当を設置しました。

●今後の取り組みと株主の皆様へのメッセージ

今後の展開と、株主の皆様へのメッセージをお願いします。

今後の国内経済は、全世界に波及した金融不安の高まりや株式・為替市場の変動等により、景気は引き続き弱含みで推移するものと予想されます。

当社では、組織力の充実に努めて足元の事業を着実に推進しながら、今後の成長領域である「情報通信」「ライフサイエンス」



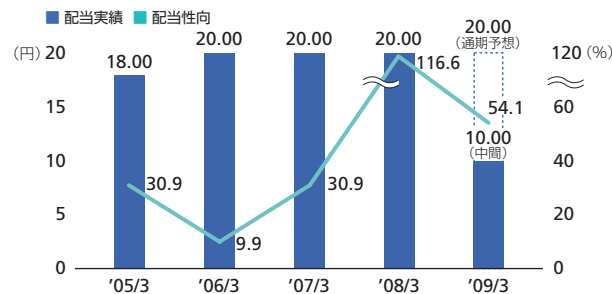
「環境」「エネルギー」の各分野に向けた三新経営（新製品の開発、新技術の開発、新市場への参入）を進め、長期的な視野での企業価値を高めてまいります。

同時に、株主の皆様に対する利益還元と自己資本利益率の向上を経営の最重要課題に位置付け、安定的かつ継続的な配当を行うことを基本とし、業績の進展状況に応じて配当性向等を勘案した施策を実行してまいります。さらに、IR活動などを通じた株主の皆様との対話を積み重ね、皆様の声に常に耳を傾けながら、企業価値・株主価値を高めるための経営を続けてまいります。

そして、株主の皆様のご期待に応えるため、企業体質をさらに強化し収益を向上させることで、企業価値の増大に努めてまいりますので、長きにわたるご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

2008年12月  
代表取締役社長 藤森 明彦

これまでの配当実績・配当性向（連結）



※06/3は記念配当を含んでおります。

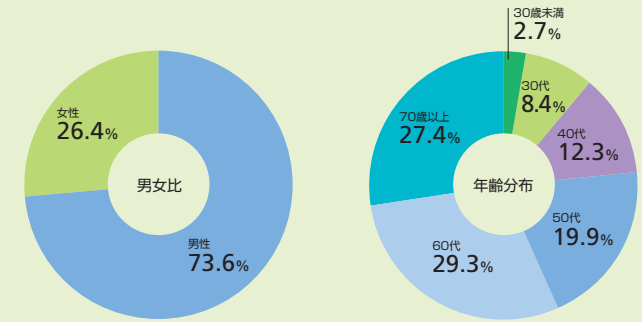
株主優待制度のご案内

当社では、3月31日現在の株主名簿および実質株主名簿に記載された1単元（100株）以上保有の株主の皆様へ優待品を贈呈しています。贈呈時期は6月です。



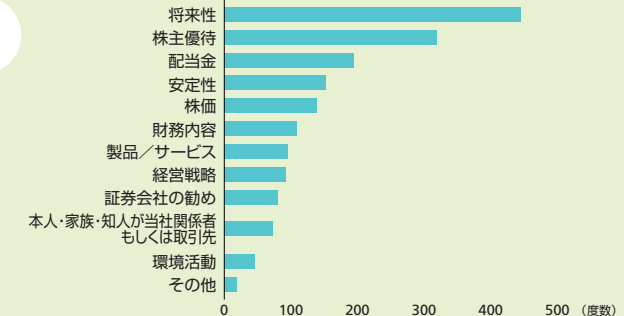
「ピゼットちゃん」は2004年、当社創立90周年を記念して社内公募で選ばれた当社マスコットキャラクターです。

当社では株主の皆様が私たちに何を期待し、どのようなことを希望されているのかを知るため、5,802名（2008年3月31日現在）の株主の皆様を対象にアンケート調査を実施いたしました。本調査では、全株主数の13.8%にあたる803名の方々からご回答をいただきましたので、ご報告させていただきます。



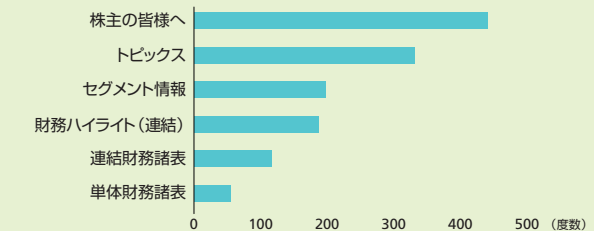
Q. 当社の株式を購入された理由をお聞かせください。（複数回答可）

A. 445名の方に「将来性」を挙げていただきました。これは、「新製品の開発」「新技術の開発」「新市場への参入」を柱とする三新経営を実践してきたことへの評価をいただいたものと考えております。今後も成長領域である「情報通信」「ライフサイエンス」「環境」「エネルギー」の各分野での取り組みを強化してまいります。



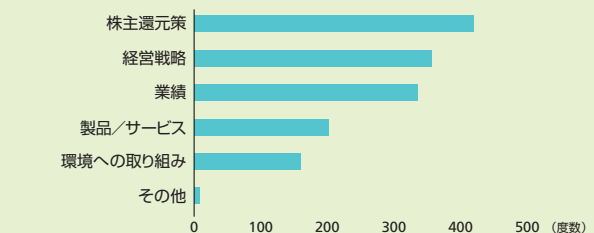
Q. 株主通信の中で興味を持たれた内容は何ですか。（複数回答可）

A. 「株主の皆様へ」と「トピックス」が上位を占めました。中長期的なビジョンおよび現在取り組んでいる内容について興味を持っていたものと考えております。今後も当社の取り組みを分かりやすくご説明してまいります。



Q. 今後どのような情報の充実を希望されますか。（複数回答可）

A. 「株主還元策」「経営戦略」「業績」へのご要望を多くいただきました。このほか、「製品/サービス」に関する情報へのご要望もいただきました。株主の皆様のご要望にお応えできる情報発信に努めてまいります。

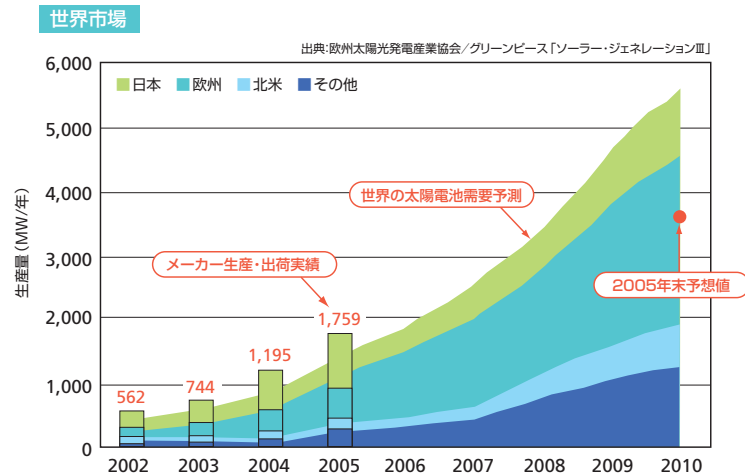


化石燃料の枯渇の問題、また日常生活や様々な事業活動から発生するCO<sub>2</sub>による地球温暖化問題などから、太陽電池に対する注目が集まっています。今回は、ますます注目の集まる太陽電池について、市場規模や仕組み、そして藤森工業の取り組みなどをQ&A形式でご紹介します。

## Q1 太陽電池の市場動向は？

### A1 全世界的に高成長が続いている市場です。

太陽電池市場は、欧州を中心に年率30%以上の高成長が続いており、有機系太陽電池を除く主要太陽電池の2007年度における世界的市場規模は約3,000MW（メガワット）であり、今後もこれまで以上の伸びを示す見込みです。2020年時点では70,000MWを超え、大規模発電用も本格的に立ち上がることが予測されています。



## ご存知ですか？ソーラーパワーの実力

太陽光は1m<sup>2</sup>あたり約1kWのエネルギーを地球上に降りそそいでいます。例えば、ゴビ砂漠全部に太陽電池を敷きつめると、現在地球上で人間が使っているエネルギーの全てをまかなうことができます。それも、太陽電池の性能が上がりコストがどんどん下がっていけば、遠い夢の話ではありません。なんとと言っても、太陽光発電は地球の環境に悪影響がない、クリーンなエネルギーだというのが一番の魅力です。



### ●太陽エネルギーと地球の表面積



出典：独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）

## Q2 太陽電池にはどんな種類がありますか？

### A2 大きく分けて、シリコン系と非シリコン系の太陽電池に分類されます。

太陽電池は半導体の一種ですが、使われる半導体によっていろいろな種類があり、大きくはシリコン系とそれ以外に分類することができます。現在の主流は結晶シリコン系の太陽電池で、性能や信頼性の面で優れていますが、基板の価格が高いことが課題となっています。その課題を解決するために、シリコン以外の材料での太陽電池の開発が進められています。

材料	種類	理論効率	製造コスト
シリコン系	結晶系	結晶シリコン型	○ △
		多結晶シリコン型	○ △
	薄膜系	アモルファスシリコン型	△ △
非シリコン系	化合物系	ガリウムヒ素型	◎ ○
		CIS、CIGS型	◎ ○
	有機系	色素増感型	△ ◎

## 太陽電池と藤森工業

現在主流であるシリコン系の太陽電池は、市場の急拡大のため、モノシランガスなど材料の不足が懸念されています。このような状況の中で注目され期待されているのが、色素増感型太陽電池です。

色素増感型太陽電池は、製造コストが従来の太陽電池より安く、大量生産が可能であり、また、原材料の資源的制約が少ないことから、様々な目的や用途にあった製品開発が可能などの特長があります。また、他の太陽電池と比較して、弱い光に対する感度が最も高いことから、屋内での発電も可能です。よって、自ら発電する機能を持つ携帯機器向け電源用途への期待が高まっています。この色素増感型太陽電池は、印刷・コーティング・ラミネートといった技術を利用することにより、プラスチックフィルム型での生産が可能です。

これらの技術は藤森工業の主幹技術であり、現在、色素増感型太陽電池の透明電極材、外装材などの開発を行い、実用化に向けての取り組みを積極的に進めています。

藤森工業の技術が  
クリーンなエネルギーを作るんだね。

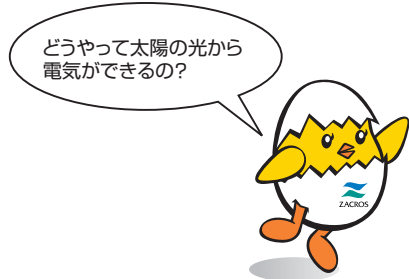
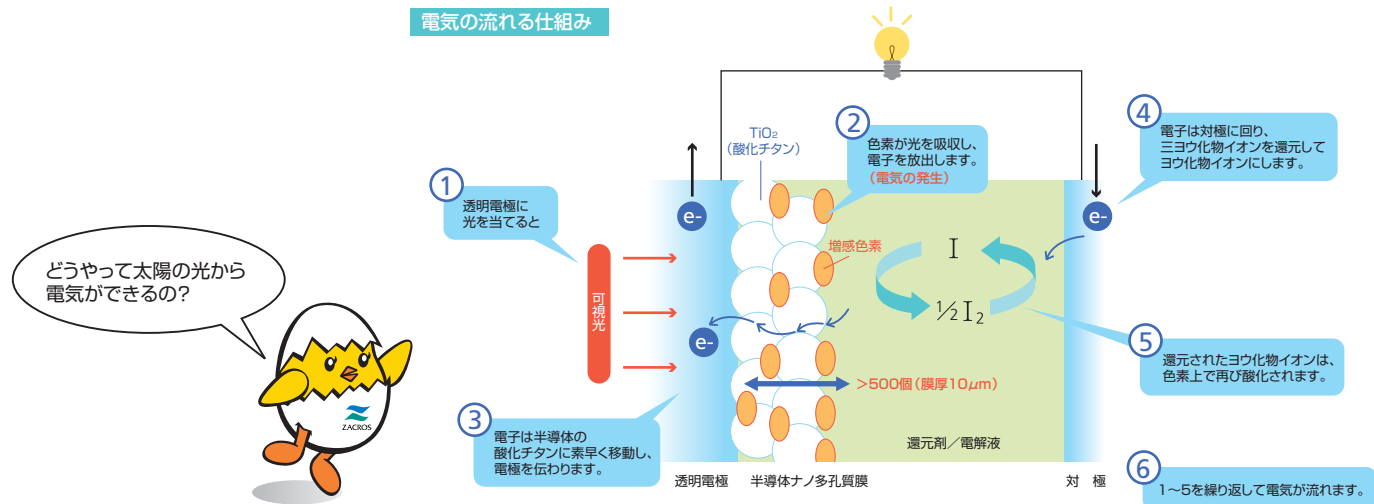


### ●色素増感型太陽電池の特長と課題

特長	課題
コスト	出力特性
製造プロセス	信頼性
意匠性 (フィルム化、多色化)	生産技術

### Q3 色素増感型太陽電池の発電の仕組みは？

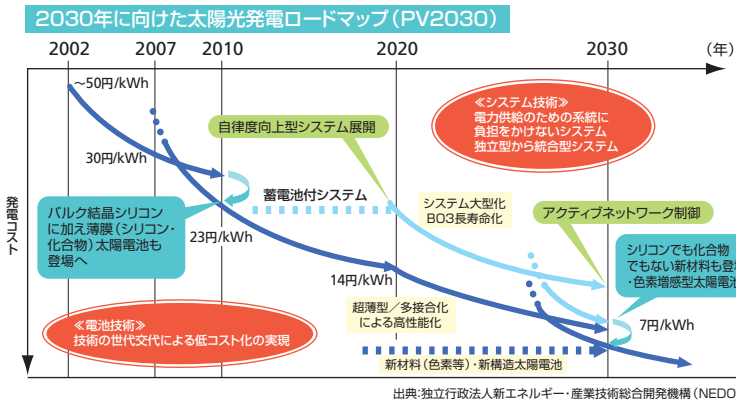
A3 色素が光を吸収して電子を放出することで発電できます。



### Q4 太陽電池の今後はどのようなものですか？

A4 様々なシーンにおける実用化を目指し、引き続き開発を続けていきます。

従来のシリコンやCIGSなどの固体素子では製造ラインが高コストであるために、コンシューマー分野で求められる太陽電池の低価格化には限界がありました。しかし、色素増感型太陽電池の技術開発の進展によって、軽量で加工しやすいなどの特長から、携帯機器やパソコン、ゲーム機器など市場が急拡大する分野でのユビキタス電源としての期待が高まっています。

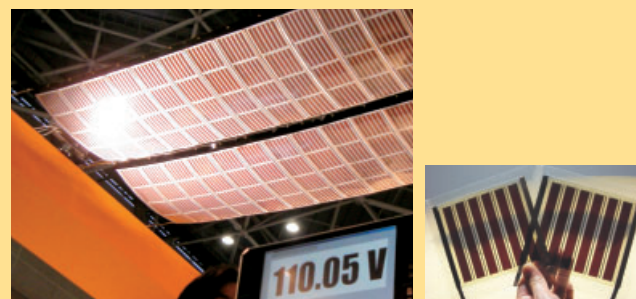


- これからの色素増感型太陽電池**
- ①ガラスを使わないので、軽くて持ち運びができ、いろいろな形状に加工が可能となる。  
⇒モバイル電源など、ユビキタス電源ニーズに対応
  - ②蛍光灯など、弱い光に対するの感度が、他の太陽電池に比べて最も高いため、室内用途としての期待が高い(光電池としての能力に期待)。  
⇒夜間照明、商業施設の照明からのエネルギー回収システムなど
  - ③生産設備投資額が安価であることから、大量生産による低コスト生産が可能となる。  
⇒汎用電力並みの発電コスト(7円/kWh程度)を達成できる可能性を有する

#### 藤森工業の技術の特長

当社は、桐蔭横浜大学のベンチャー企業であるベクセル・テクノロジー(株)と共同で次世代の薄型フレキシブル太陽電池の開発を進めており、高速・低コストの印刷方式で製造が可能なプラスチック色素増感型太陽電池モジュールの面積化の開発に成功しました。表面抵抗を20分の1以下まで低減したメタルマイクログリッド構造を持つ新規の透明導電膜を採用したことにより、面積電池において出力を大幅に上げることが可能となり、実用化に一歩近づいたことができます。

この技術は、2008年2月27日から29日に、東京ビッグサイトで開催された第1回国際太陽電池展 (PV EXPO2008) の会場に設置して、一般に公開いたしました。



サイズ：幅0.8m、長さ2.1m (世界最大)  
厚さ：0.5mm  
重量：1m<sup>2</sup>あたり800g (太陽電池として最軽量)  
出力電圧：屋内100V以上

#### 今後の展望

藤森工業の色素増感型太陽電池の開発における課題や今後の展望について、実際の開発に携わっている飯塚グループリーダーにお話を聞きました。



エネルギー関連素材開発グループリーダー  
飯塚 宏和

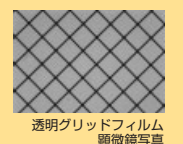
#### Q・色素増感型太陽電池の課題は？

色素増感型太陽電池の技術課題の一つは、いかに内部抵抗を減らし、効率良く電子を動かして発電効率を上げるかです。その対策の一つとして、従来のITO透明電極の表面固有抵抗が14  $\Omega/\text{cm}^2$ であったのに対して、当社の透明グリッド電極(右上写真)を使用すると、透明性を維持しながら抵抗を1/10以下に下げることが可能なので、集電・発電の効率化が期待できます。

#### Q・今後の展望は？

また、色素増感型太陽電池の耐久性の低さは素子が水分に弱いことに帰因しており、その対策として、当社は食品薬品包装で開発してきた透明バリアフィルムを外装として利用することで耐久性の向上を図っています。さらに性能を上げるために、既存の精密コーティング技術で半導体膜であるチタン膜を塗布することで、理想的な構造を完成させたいと考えています。

以上のように、今まで培った技術を応用することで、プラスチックフィルム色素増感型太陽電池の製品化に貢献していく所存です。

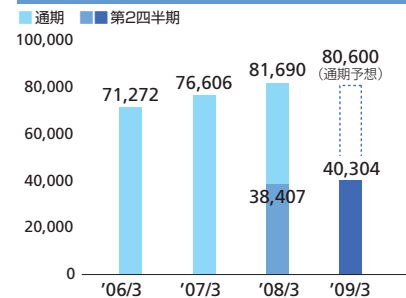


●財務ハイライト

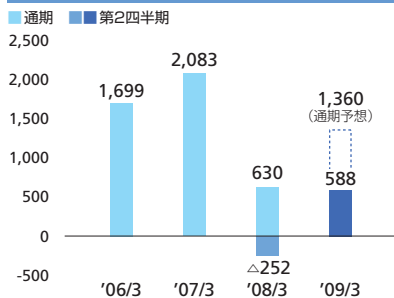
	2006/3	2007/3	2007/9	2008/3	2008/9
売上高 (百万円)	71,272	76,606	38,407	81,690	40,304
化成品 (百万円)	59,977	63,574	32,974	69,743	35,191
建築資材他 (百万円)	11,294	13,032	5,432	11,947	5,113
営業利益又は損失(△) (百万円)	1,699	2,083	△252	630	588
化成品 (百万円)	1,636	1,855	△282	581	489
建築資材他 (百万円)	63	228	29	49	99
経常利益又は損失(△) (百万円)	1,817	2,136	△195	693	652
四半期(当期)純利益又は損失(△) (百万円)	3,513	1,118	△101	296	212
1株当たり四半期(当期)純利益又は損失(△) (円)	201.22	64.68	△5.84	17.15	12.29
総資産 (百万円)	63,676	75,726	83,155	77,438	73,370
純資産 (百万円)	27,879	29,146	29,141	28,983	28,868
自己資本当期純利益率 (%)	13.5	4.0	-	1.0	-
総資産経常利益率 (%)	2.9	3.1	-	0.9	-

(注) 2007年3月期より「貸借対照表の純資産の部の表示に関する会計基準」等を適用しています。

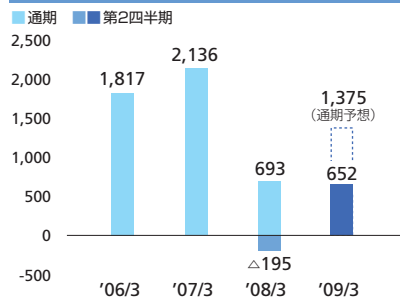
売上高(百万円)



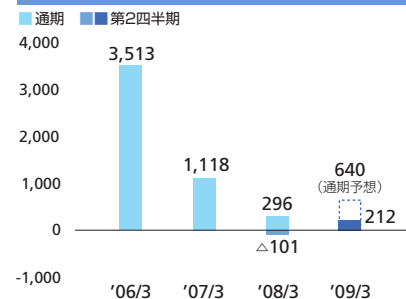
営業利益又は損失(△)(百万円)



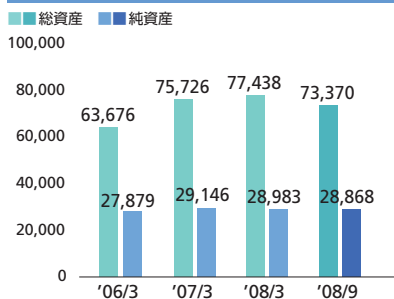
経常利益又は損失(△)(百万円)



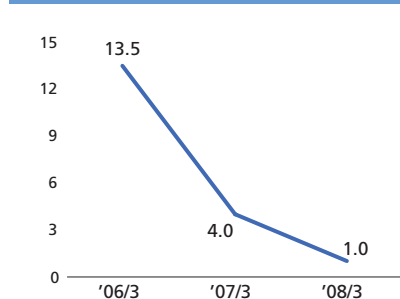
四半期(当期)純利益又は損失(△)(百万円)



総資産・純資産(百万円)



自己資本当期純利益率(%)



●四半期連結貸借対照表(要旨)

(単位:百万円)

科目	当第2四半期末 2008年9月30日現在	前期末 2008年3月31日現在
<b>資産の部</b>		
流動資産	36,075	38,399
現金及び預金	1,436	1,940
受取手形及び売掛金	24,575	26,065
商品及び製品	3,603	3,323
仕掛品	3,286	3,411
原材料及び貯蔵品	1,730	1,687
繰延税金資産	475	432
その他	987	1,565
貸倒引当金	△20	△27
固定資産	37,294	39,039
有形固定資産	32,323	34,219
建物及び構築物	14,251	14,729
機械装置及び運搬具	11,969	13,235
工具器具及び備品	698	729
土地	4,920	4,946
建設仮勘定	482	578
無形固定資産	575	680
投資その他の資産	4,395	4,139
投資有価証券	3,076	2,932
繰延税金資産	511	530
その他	1,173	1,033
貸倒引当金	△366	△355
資産合計	73,370	77,438

Point.1 総資産について

総資産は、前期末に比べ40億68百万円減少して733億70百万円となりました。これは、投資有価証券等の増加があったものの、受取手形及び売掛金、有形固定資産等が減少したことによるものです。

(単位:百万円)

科目	当第2四半期末 2008年9月30日現在	前期末 2008年3月31日現在
<b>負債の部</b>		
流動負債	25,261	29,258
支払手形及び買掛金	17,411	19,152
短期借入金	2,293	4,758
1年内償還予定の社債	-	200
未払金	1,782	1,931
未払法人税等	305	275
賞与引当金	821	816
役員賞与引当金	22	34
その他	2,624	2,089
固定負債	19,240	19,196
長期借入金	14,240	14,156
繰延税金負債	787	778
退職給付引当金	3,401	3,454
役員退職慰労引当金	376	359
その他	434	446
負債合計	44,501	48,455
<b>純資産の部</b>		
株主資本	27,379	27,340
資本金	4,723	4,723
資本剰余金	5,778	5,778
利益剰余金	16,888	16,849
自己株式	△10	△10
評価・換算差額等	936	1,084
その他有価証券評価差額金	882	797
為替換算調整勘定	53	287
少数株主持分	551	558
純資産合計	28,868	28,983
負債純資産合計	73,370	77,438

Point.2 純資産について

純資産は、少数株主持分5億51百万円を含めて288億68百万円となり、この結果、自己資本比率は前期末の36.7%から38.6%となりました。

● 四半期連結損益計算書(要旨)

(単位:百万円)

科目	当第2四半期	前第2四半期(ご参考)
	自2008年4月1日 至2008年9月30日	自2007年4月1日 至2007年9月30日
売上高	40,304	38,407
売上原価	34,716	33,484
売上総利益	5,588	4,922
販売費及び一般管理費	5,000	5,174
営業利益又は損失(△)	588	△252
営業外収益	310	299
営業外費用	246	242
経常利益又は損失(△)	652	△195
特別利益	1	31
特別損失	193	40
税金等調整前四半期純利益又は純損失(△)	461	△204
法人税、住民税及び事業税	267	46
法人税等調整額	△60	△178
少数株主利益	40	28
四半期純利益又は純損失(△)	212	△101

Point.3 四半期純利益について

機能材料部門において、新設の当社昭和事業所の増産設備が稼働したLCD用マスキングフィルムが大きく売上を伸ばし、包装部門では高付加価値製品の販売強化を推進しつつ詰め替え用スタンディングパウチ等を中心に受注を拡大しました。さらに、全部門にわたり経費削減に努めた結果、四半期純利益は2億12百万円となりました。

当冊子の表記について

当期から金融商品取引法に基づく四半期報告制度が導入されたことにより表記内容が変更されていますが、当冊子では株主様の利便性を考慮し、以下のとおり記載しています。

- 収益関連数値については、期初からの「累計値」を用いています。
- 当第2四半期の財務情報と前年同期の財務情報とは会計基準や用語表現などが異なります。しかし前年と比較しやすいよう、主要数値については「ご参考値」として併記しています。その際、前年同期(中間期)については「前第2四半期」と記述しています。

● 四半期連結キャッシュ・フロー計算書(要旨)

(単位:百万円)

科目	当第2四半期	前第2四半期(ご参考)
	自2008年4月1日 至2008年9月30日	自2007年4月1日 至2007年9月30日
営業活動による キャッシュ・フロー	3,705	1,001
投資活動による キャッシュ・フロー	△1,234	△5,074
財務活動による キャッシュ・フロー	△2,761	4,615
現金及び現金同等物に 係る換算差額	△94	54
現金及び現金同等物の 増減額(△は減少)	△384	597
現金及び現金同等物の 期首残高	1,750	4,392
現金及び現金同等物の 四半期末残高	1,366	4,989

Point.4 営業活動によるキャッシュ・フローについて

営業活動の結果、得た資金は37億5百万円となりました。これは、たな卸資産の増加、仕入債務の減少などの資金減少要因があったものの、売上債権の減少、当社昭和事業所を中心に減価償却費があったこと等によるものです。

会社概要

社名 藤森工業株式会社  
FUJIMORI KOGYO CO.,LTD.  
創立 1914年(大正3年)4月1日  
設立 1936年(昭和11年)11月4日  
資本金 47億23百万円  
従業員 1,002名(連結1,521名)

(注) いずれも2008年9月末の正社員在籍人員で、決算資料人数とは必ずしも一致しません。

● 役員一覧

代表取締役社長 藤森明彦  
代表取締役副社長 藤森伸彦  
専務取締役 野竹康夫  
常務取締役 飯島崇夫  
取締役 藤森行彦  
取締役 布山英士  
取締役 吉野彰志郎  
常勤監査役 金谷喜久次  
監査役 上住元彦  
監査役 竹下直慶  
監査役 井口一二三

(注) 監査役上住元彦および竹下直慶の両氏は、社外監査役です。

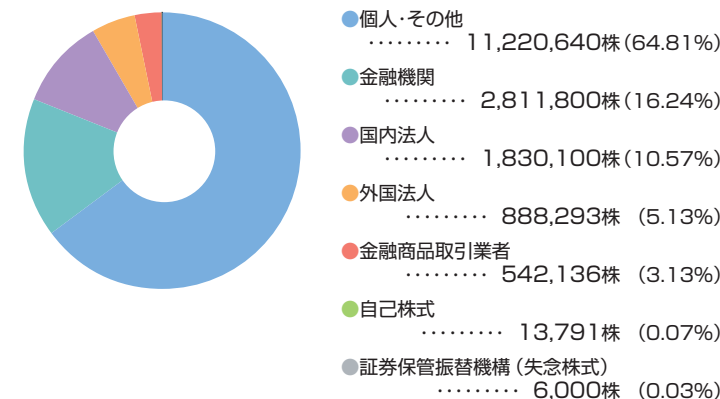
● 当社グループ

- [連結子会社]  
・フジモリ産業株式会社  
・フジモリブラケミカル株式会社  
・まつやゼロファン株式会社  
・THAI FPC CO., LTD.
- [非連結子会社]  
・南栄アクト株式会社  
・MFPC SDN. BHD.  
・アデコ株式会社  
・ZACROS (HONG KONG) CO., LTD.
- [関連会社]  
・THAI FUJIMORI TRADING CO., LTD.

株式の状況

発行可能株式総数 .....45,000,000株  
発行済株式総数 .....17,312,760株  
(自己株式13,791株を含む)  
株主数 .....5,117名

● 所有者別株式分布の状況



● 地域別株主分布の状況

